

石川県立看護大学附属看護キャリア支援センター

事業報告書

第 1 卷

平成 26 年度

石川県立看護大学附属看護キャリア支援センター

巻 頭 言

看護キャリア支援センターは、平成 25 年 11 月に本学の 3 つ目の附属機関として設立されました。開学以来、地域ケア総合センターが担ってきた看護職者の人材育成事業を受け継ぎ、看護職者のキャリア形成を支援、推進する中核拠点として設立に至りました。

思い起こせば、平成 23 年の夏頃、石垣和子学長の「さらなる看護大学における地域貢献は何か？」の問いを看護系の教授に投げかけたことが、当センターの設立に結びつく発端でした。そのような中で、浮上したのが認定看護師教育です。看護職者のキャリア形成の場は多岐にわたっており、本学でも平成 16 年度より大学院教育で専門看護師の育成に取り組んできました。しかし、北陸地区においては、看護のスペシャリストといわれている専門看護師や認定看護師の数は極めて少ない状況でした。そこで、北陸三県にある病院の看護管理者に対して認定看護師教育へのニーズ調査を実施し、要望の高い「感染管理」「認知症看護」など、臨床で課題となっている分野の教育課程の開設を希求していることが明らかになりました。そして、専任教員の確保の可能性が高い「感染管理認定看護師」教育課程の開設に向けて動き始めました。開設準備のための財源や専任教員の確保など、課題は山積していましたが、平成 25 年 10 月に教育機関として認められ、平成 26 年度から「感染管理認定看護師教育」がスタートしました。

看護キャリア支援センター事業報告第 1 巻は、感染管理認定看護師の育成および当センターの後援により実施された石川県高度・専門医療人材育成事業の内容についてまとめたものです。平成 26 年度に開催した事業は、石川県をはじめ多くの関係者の皆様から多大な支援を賜って行われたものです。あらためて、皆様のご支援・ご協力に深く感謝申し上げます。

石川県立看護大学
附属看護キャリア支援センター
丸岡直子

目 次

(ページ)

I. 感染管理認定看護師教育課程	1-5
1. 目的・目標	1
2. 実施状況	1
3. 実施内容	1
4. 評価	5
5. 今後の課題	5
II. 石川県高度・専門医療人材養成支援事業	
在宅療養移行支援「退院支援」	6-10
1. 目的	6
2. 実施状況・実施内容	6
3. 評価および今後の課題	7

I. 平成 26 年度 感染管理認定看護師教育課程

1. 目的・目標

【目的】

医療関連感染の予防と管理に必要な専門的知識及び高度な技術を持つ感染管理認定看護師を育成し、安全な医療を提供する。

【目標】

- 1) 感染管理における病院の役割と機能及びシステムについて理解する。
- 2) 感染管理に必要な感染症と抗菌薬、および微生物と微生物検査について知る。
- 3) 病院感染対策の基本をふまえ、エビデンスのある感染防止技術を理解する。
- 4) 職業感染予防を理解する。
- 5) 医療関連感染サーベイランスについて理解する。
- 6) 自施設の感染防止対策の課題を明らかにし、改善策を考える。

2. 実施状況

【期間】

平成 26 年 7 月 16 日（水）～ 平成 27 年 2 月 18 日（水）

【履修生数】

30 名

【履修生の背景】

- 1) 基本属性
性別 女性 26 名 男性 4 名
平均年齢 40.7 (27-53) 歳
所属施設の所在地 石川県：20 名、富山県：4 名、福井県：2 名、滋賀県：2 名
京都府：1 名、新潟県：1 名

- 2) 入学時の臨床経験年数と感染に関する実務経験年数（表 1）

表 1 入学時の臨床経験と感染に関する実務経験

	臨床経験（名）	感染に関する実務経験（名）
3～5 年		18
5～10 年	8	10
11～15 年	8	1
16～20 年	4	1
21～	10	
平均経験年数	17 年	6 年

3. 実施内容

【カリキュラム】

認定看護師教育課程のカリキュラムは、認定看護師の水準を均質にするため、公益社団法人日本看護協会が定める教育基準カリキュラムに則って構成されている。日本看護協会が定めた認定看護師教育基準カリキュラムは、各分野に共通している「共通科目」と各分野の専門的知識を学ぶ「専門基礎科目」と「専門科目」、「学内演習及び臨地実習」に分かれている。修了要件

は、「共通科目」「専門基礎科目」「専門科目」「学内演習及び臨地実習」のすべての授業科目を履修し、かつ修了試験に合格することである。授業科目及び時間数を表 2 に示す。

表 2 授業科目と時間数

授 業 科 目		時間数
共 通 科 目	看護管理	15
	リーダーシップ	15
	文献検索・文献講読	15
	情報管理	15
	看護倫理	15
	指導	15
	相談	15
	臨床薬理学	15
		【小計】 120
専 門 基 礎 科 目	感染管理学	30
	疫学と統計学	30
	微生物・感染症学	45
	医療管理学	15
	【小計】 120	
専 門 科 目	医療関連感染サーベイランス	45
	感染防止技術	30
	職業感染管理	15
	感染管理指導と相談	15
	洗浄・消毒・滅菌とファシリティマネジメント	15
	【小計】 120	
	学内演習	
	感染管理プログラムの立案 I	
	感染管理プログラムに必要な知識	90
	微生物検査演習	
	臨地実習	180
	総時間数	630

【教員・担当科目】

主任教員：石川倫子（准教授）

担当科目：文献検索・文献講読、リーダーシップ、看護倫理、指導、感染管理学、感染防止技術、学内演習、臨地実習

専任教員：竹村美和（特任講師）

担当科目：看護管理、リーダーシップ、看護倫理、相談、感染管理学、医療関連感染サーベイランス、感染管理指導と相談、洗浄・消毒・滅菌とファシリティマネジメント、学内演習、臨地実習

【非常勤講師】

非常勤講師・担当科目一覧を表3に示す。

表3 非常勤講師・担当科目

講師名	所属	担当科目
吉村光弘	公立能登総合病院	情報管理
石田美由紀	やわたメディカルセンター	臨床薬理学
水野宏昭	地域医療支援機構金沢病院	臨床薬理学
田淵克則	国立病院機構金沢医療センター	臨床薬理学、微生物・感染症学
池田浩幸	石川勤労者医療協会城北病院	臨床薬理学
洪 愛子	日本看護協会	感染管理学
高山一夫	京都橘大学	感染管理学
中田恵子	やわたメディカルセンター	感染管理学
藤田 烈	東京大学医学部附属病院	疫学と統計学
飯沼由嗣	金沢医科大学	微生物・感染症学
馬場尚志	金沢医科大学	微生物・感染症学
西 耕一	石川県立中央病院	微生物・感染症学、洗浄・消毒・滅菌とファシリティマネジメント
土島 睦	金沢医科大学	微生物・感染症学
中積泰人	金沢市立病院	微生物・感染症学
上田幹夫	NTT 西日本金沢病院	微生物・感染症学
新川晶子	石川県立中央病院	微生物・感染症学、医療関連感染サーベイランス
千田靖子	金沢大学附属病院	微生物・感染症学
金谷和美	金沢医科大学病院	微生物・感染症学
浅香敏之	国立病院機構金沢医療センター	微生物・感染症学
南 陸男	能登中部保健福祉センター	医療管理学
新谷静子	東海北陸厚生局石川事務所	医療管理学
越後純子	金沢大学附属病院	医療管理学
嶋田由美子	公立松任石川中央病院	医療関連感染サーベイランス
室井洋子	福井大学医学部附属病院	医療関連感染サーベイランス、感染防止技術
西村元一	金沢赤十字病院	医療関連感染サーベイランス
野田洋子	金沢医科大学病院	感染防止技術、学内演習
本田房子	やわたメディカルセンター	感染防止技術
青木雅子	富山大学附属病院	感染防止技術
木下幸子	金沢医科大学	感染防止技術
鍛冶佳美	地域医療支援機構金沢病院	感染防止技術
西村一美	福井大学医学部附属病院	感染防止技術
前田修子	金沢医科大学	感染防止技術
近藤祐子	石川県立中央病院	感染防止技術、洗浄・消毒・滅菌とファシリティマネジメント
藤川真佐子	石川県立中央病院	感染防止技術
江波麻貴	浅ノ川総合病院	感染防止技術
森河裕子	金沢医科大学	職業感染管理
西原寿代	国立病院機構金沢医療センター	職業感染管理
小森幸子	山中温泉医療センター	職業感染管理
架間ゆき子	金沢市立病院	職業感染管理
池田恵子	石川勤労者医療協会城北病院	洗浄・消毒・滅菌とファシリティマネジメント
所 正治	金沢大学	微生物検査演習
浅見 洋	石川県立看護大学	看護倫理
今井美和	石川県立看護大学	微生物検査演習
大木秀一	石川県立看護大学	疫学と統計学
垣花 涉	石川県立看護大学	情報管理
川島和代	石川県立看護大学	医療管理学
武山雅志	石川県立看護大学	相談
松原 勇	石川県立看護大学	情報管理
丸岡直子	石川県立看護大学	看護管理、リーダーシップ

【教育課程の実施状況】

感染管理認定看護師教育課程の年間スケジュールは表 4、実習施設は表 5 に示す。

表 4 年間スケジュール

日程	実施内容
7月16日	開講式
7月～10月	講義・演習
11月4日～5日	微生物演習
11月17日～12月19日	臨地実習
12月24日	実習報告会
平成27年1月9日	感染管理プログラム発表
1月26日	修了試験
2月6日、12日	特別講義
2月26日	修了式

表 5 臨地実習施設と実習指導者

施設名	実習指導者
石川県立中央病院	近藤 祐子
公立松任石川中央病院	嶋田 由美子
金沢医科大学病院	野田 洋子
福井県済生会病院	細田 清美
国立病院機構金沢医療センター	西原 寿代
福井赤十字病院	田中 真理子
地域医療機能推進機構金沢病院	鍛冶 佳美
福井大学医学部附属病院	室井 洋子
石川勤労者医療協会城北病院	池田 恵子
富山大学附属病院	北川 洋子
金沢市立病院	架間 ゆき子
富山赤十字病院	亀山 礼子
山中温泉医療センター	小森 幸子



グループワーク



微生物検査演習

4. 評価

【履修状況に関する評価】

講義・演習については、履修生全員が期間内に科目認定され、実習を履修した。実習では、講義・演習での知識・技術を統合した学びが得られ、全員が認定された。その上で修了試験を受け、履修生 30 名全員が合格し、本教育課程を修了した。

【履修生の学んだ内容（一部抜粋）】

1) サーベイランス

- ・感染率が出ないとフィードバックが難しいと思っていたが、大切なことは、プロセスも同時に観察することである。
- ・医療関連感染サーベイランス、手指衛生、感染防止技術の観察を並行して実施することにより、関連付けて分析することの意味を確認することができた。

2) システム

- ・ICT（Infection Control Team）のミーティングは、ICTメンバーの情報を共有し、各メンバーの専門性を活かした意見交換を行い、お互いの役割認識と役割を重視していると理解できた。
- ・ICT ラウンドの結果は、全職員へフィードバックし、改善に向けた対策を共に考えていた。
- ・病院にどうやったら貢献できるか、人として信頼を築き、自施設に対する熱い思いをもって行動していくことが、感染防止対策への推進の原動力になると感じた。
- ・多職種との連携がなくてはならないため、感染管理を行っていく上で、看護師の立場から多職種と共に取り組むことが一番重要であると学んだ。
- ・施設の中での自己の役割を明確にし、エビデンスをもって自分の考えを述べ、周りとの協働して活動できるようにしていきたいと思った。

3) 指導

- ・院内全職種への感染管理指導は、レディネスに応じたレベルの内容で実施することが重要である。
- ・これまで行ってきた指導は、一般的知識を一方向的に講じていたに過ぎなかった。指導内容を対象に理解してもらうためには、まず対象の情報収集をすることから始まる。その現場に入り込み、職種の内容や特徴、知識の程度、感染管理の実践の現状などを把握した上で、どんな指導が必要なのか、どのような方法で講じればよいのかを考慮し、指導内容を作成する必要があることを学んだ。

【認定看護師審査】

平成 27 年 5 月に行われた第 23 回認定看護師認定審査において、29 名が感染管理認定看護師の資格を取得した。

5. 今後の課題

講義・演習の科目を認定する期間が短く、実習準備が効果的に行うことができなかったため、平成 27 年度から教育課程期間を 1 週間多くする予定である。また実習期間が年末となり、実習指導者が実習に専念できないため、実習開始日を 1 週間早める必要がある。これらを考慮して教育課程を計画していく。

II. 石川県高度・専門医療人材養成支援事業 在宅療養移行支援「退院支援」

1. 目的

医療施設において入院患者に退院支援を行う看護師に対して、外来から始まる退院支援プロセス、多職種連携、在宅医療および家族看護の理解を深めるための事例検討会や退院支援セミナーを開催し、患者・家族に対する看護師の退院支援能力の向上を目指す。平成26年度は、退院支援セミナーを3回、公開事例検討会を7回開催した。

なお、本年度の活動は平成26年度に石川県高度・専門医療人材養成支援事業の助成を受け、本学附属看護キャリア支援センターの後援により実施したものである。

【担当者】

丸岡直子、林一美、石川倫子、浅見美千江

下嶋恵美子、向井孝子、尾崎真裕美、倉下陽子、新田敦子、細畑陽子、西村元一

2. 実施状況・実施内容

1) 退院支援セミナー

下記の内容で3回開催し、延べ415名が参加した(表1)。

表1 退院支援セミナー

回	開催日時	テーマ・講師	参加者数
1	8月16日(土) 10:00~15:00	家族全体を診る在宅療養支援診療所の役割 講師：黒瀬亮太(金沢ホームケアクリニック院長) 退院という課題に向き合う家族を支援する 講師：吉田千文(聖路加国際大学 教授)	85名
2	11月2日(日) 13:30~16:00	英国在宅ケアにおける認知症高齢者と 家族介護者に対する看護師の役割 講師 Ian Weatherhead (Dementia UK 認知症専門看護師)	130名
3	3月28日(土) 10:00~16:00	1) 事例検討会ダイジェスト 2) 外来-病棟連携による退院支援システムの構築 講師：出口まり子(辰口芳珠記念病院 看護局長) 3) 地域包括ケア時代における 在宅療養移行支援の重要性と展望 -この町で生ききる、を支える- 講師：宇都宮宏子(在宅療養支援研究所 代表)	200名



第3回セミナー

宇都宮先生(左)と研究会代表者(右)



第2回セミナー

Ian Weatherhead 先生ご夫妻と研究会メンバー

2) 公開事例検討会

本学、及び担当者所属施設を会場に、下記の内容で7回開催し、延べ720名が参加した(表2)。

表2 公開事例検討会

回	開催日時	テーマ	開催場所	参加者数
1	7月4日(金) 18:30~20:00	「自宅につれて帰りたい」という 家族の意思を支える	石川県立中央病院 健康教育館	144名
2	8月22日(金) 18:30~20:00	患者・家族にとっての退院の意味とは	浅ノ川総合病院 研修室	70名
3	9月27日(土) 14:00~15:30	家族の意向を優先させた 退院支援を振り返る	石川県立看護大学	56名
4	10月10日(金) 18:30~20:00	多職種連携で支えるがん患者の退院支援 多職種連携の実際と 患者家族からみた退院支援の評価	金沢医療センター 講堂	130名
5	11月14日(金) 18:30~20:00	在宅療養を引き受けようとする家族の 揺れ動く気持ちや不安に寄り添うには	金沢赤十字病院 研修室	70名
6	12月13日(土) 13:30~15:00	入退院を繰り返す一人暮らしの 慢性疾患患者の療養を支えるには	石川県立看護大学	50名
7	3月28日(土) 11:00~12:00	在宅での生活を希望する がん患者を多職種で支える	石川県立看護大学	200名

3. 評価および今後の課題

1) 参加者のアンケートによる評価

(1) 退院支援セミナー

①回答者の職種(図1)

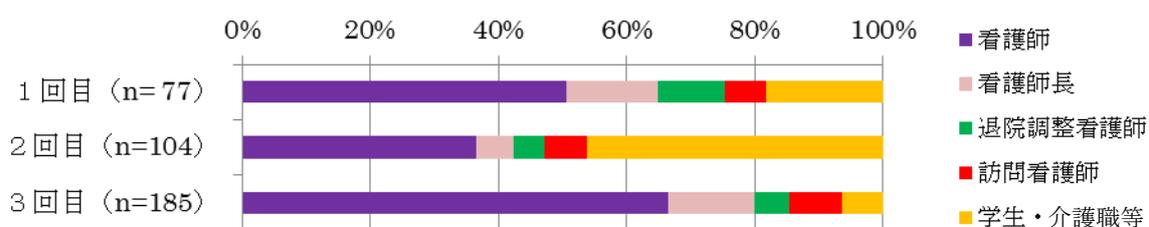


図1 回答者の職種

②退院支援を振り返る機会となったか(図2)

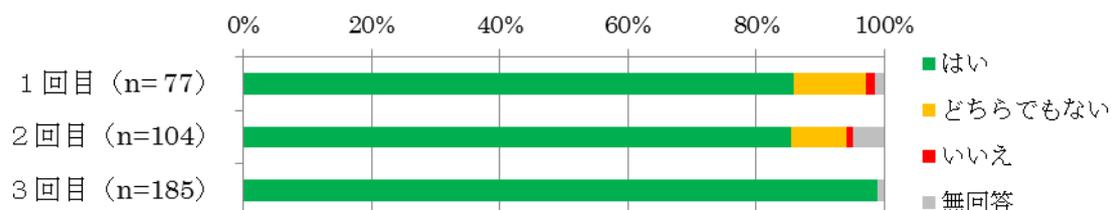


図2 退院支援を振り返る機会となったか

③今後の退院支援に活用できるか（図3）

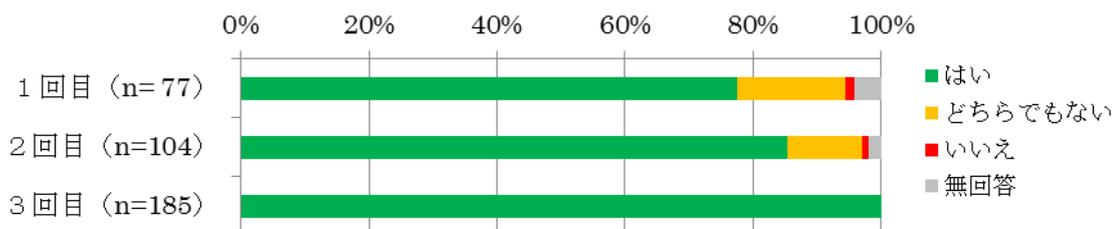


図3 今後の退院支援への活用

④自由記載からの抜粋

【第1回セミナー】

- ・家族支援について学ぶことができ、「家族の思いを聴く」ということを振り返った。
- ・患者・家族の思いを傾聴し、気持ちを受け止める。主役は患者・家族である。
- ・家族支援についてのシステムや家族に関して初めて勉強した。理論は初めて知ったが、自分でもまた学んでみたい。
- ・医師の在宅医療の実践についての講演を聴けたことが、大変参考になった。
- ・エコマップは参考になり、家族の関係性を知っておく大切さを学んだ。
- ・困難事例に対し、見方やアプローチを変えるスキルが理解できた。

【第2回セミナー】

- ・ポジティブに認知症を考えるとということ、患者を孤立させないということについて学び参考になった。
- ・家族の歴史、家族関係を知ることが大切。遠回しな聞き方ではなく、中心をついた質問をしていく必要がある。
- ・認知症看護外来を担当しているが、家族支援はとても難しいと感じている。しかし、家族一人ひとりをサポートしていきたい。
- ・介護家族と本人のギャップを埋めることや、常に認知症者本人の利益や存在を中心に考える必要性を学んだ。
- ・英国の認知症看護とアドミラルナースの役割の大切さを学んだ。
- ・異常行動に対して評価してしまっていたが、第一に本人を知るために情報収集することが大切であるということ学んだ。
- ・英国、日本の社会の課題に向き合って行かなくてはいけないと感じた。家族介護者への支援が本当に大切だと感じる。

【第3回セミナー】

- ・外来一病棟連携の退院支援システムの構築に取り組んだ過程が参考になった。
- ・病院看護師が在宅看護の場に出向くことや在宅看護研修は、患者・家族の退院後の生活をイメージした退院支援につながる。
- ・退院支援システムを構築する看護管理者の情熱とリーダーシップの重要性を感じた。
- ・講師の話にエネルギーをもらった。
- ・外来看護師と病棟看護師が連携しながらがん患者の在宅療養を支援した事例に感動した。
- ・地域でどのように生ききるか、そのための看護の役割を振り返る契機となった。

(2) 公開事例検討会

①アンケート回答者の職種 (図 4)

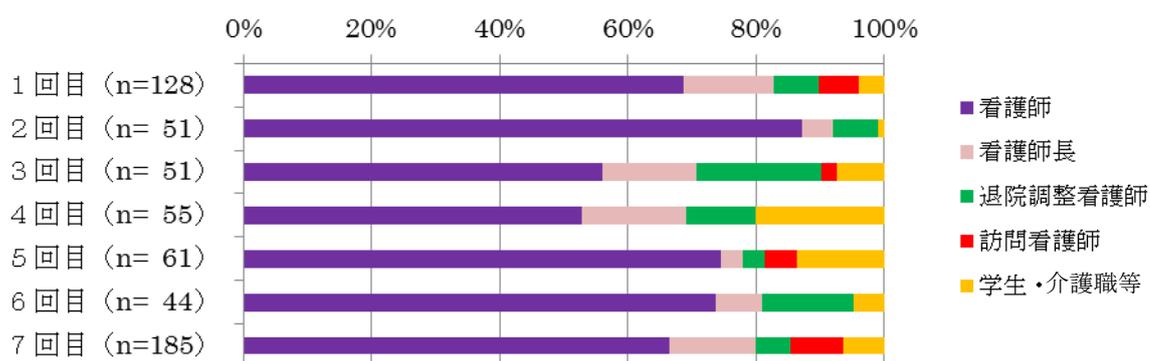


図 4 アンケート回答者の職種

②退院支援を振り返る機会となったか (図 5)

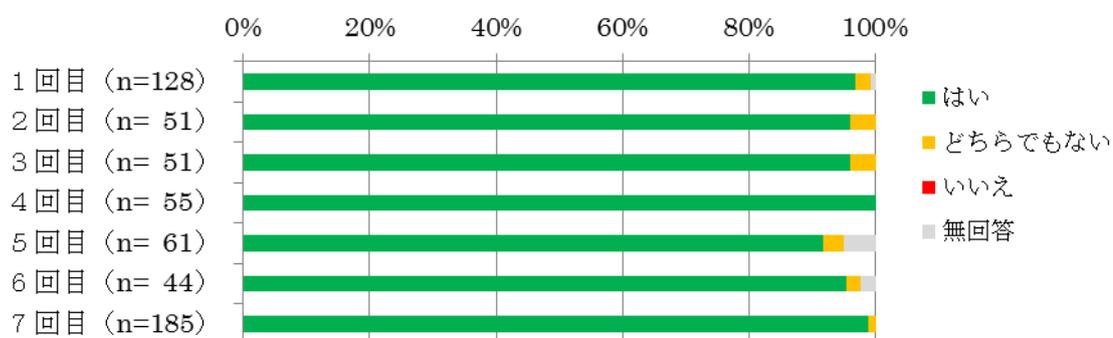


図 5 退院支援を振り返る機会となったか

③今後の退院支援に活用できるか (図 6)

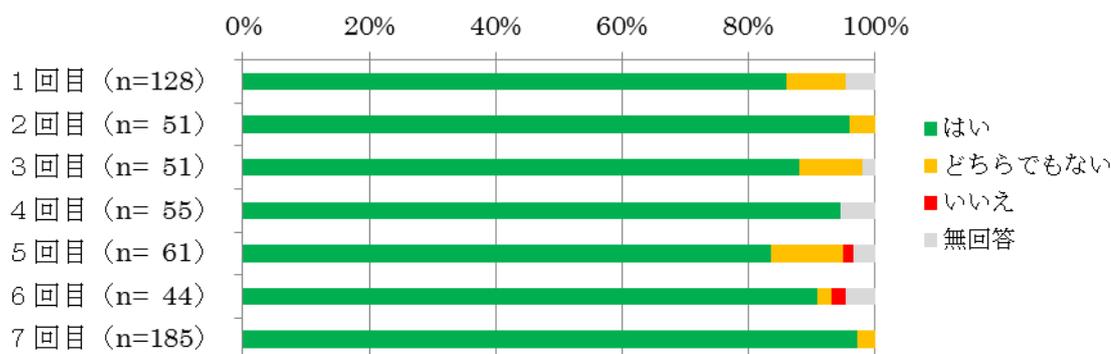


図 6 今後の退院支援に活用できるか

④自由記載から (抜粋)

- ・患者や家族のふとした時に表出される思いを聞き逃さず、希望に添えるような関わりが持てるようにしたい。
- ・多職種で院内全体、訪問看護、ご家族での事例検討会の素晴らしさを実感できた。
- ・家族の話を聞ける機会に感謝している。“病院ではなく、家に”という言葉がとても印象的だった。

- ・患者、家族の思いや希望を聞き、ただ聞き出すだけでなく、行動を起こすことが大切。
- ・普段の業務の中で「退院」という日程ばかりを意識し、医療者側の思いを押し付けているかもしれないと気づけた。
- ・患者・家族の思い、そして思いに対するズレ、不安を傾聴していく必要がある。

2) 全体評価と今後の課題

退院支援セミナーや事例検討会には多くの参加があり、看護師にとって退院支援は高い関心事であることが再確認できた。毎回、80%を超える参加者が、臨床で行っている退院支援を振り返る機会となり、学びを活用できると回答していた。退院支援のプロセス、患者・家族の意向を尊重した支援のあり方、地域の医療・福祉サービスの活用と多職種連携の実際を学ぶことができたのではないかと評価している。

地域包括ケアシステムの構築、病院の役割・機能が大きく変化する中、この事業により看護師の果たす役割の自覚と患者・家族に対する支援の強化につながったと考える。事例検討会は本学や金沢市内の病院を会場としたため、能登や南加賀地区からの参加者からは、開催場所を考慮してほしいとの要望もあった。次年度は、能登や加賀地区での開催を企画したい。また、認知症患者や精神疾患患者の退院支援事例も取り上げたいと考えている。